



腫瘍科/消化器内科, 消化器外科
毎72時間法レジメン
CPT-11+CDDP
 適応: 胃癌

レジメン

薬剤	Day 1	Day 15
CPT-11	60 mg/m ²	↑
CDDP	30 mg/m ²	↑

処方

注射処方Day1

薬剤	1日量	用法
主薬	250 mL	11:00~11:30 30分GW
カイトリル注	0 mg	11:30~11:40
デカドロン注	0 mg	
主薬	50 mL	10分GW
カンゾウ液	□ mg	11:40~12:40
主薬	500 mL	60分GW
フリキサチン注	□ mg	12:40~13:40
主薬	500 mL	60分GW
主薬	250 mL	13:40~14:10 30分GW

処方処方Day2-4

薬剤	1日量	用法
主薬	1日量	1日/5日投与法2日分

処方処方Day2-4

処方処方Day2-4

処方処方Day2-4

腫瘍科/消化器内科, 消化器外科
がん化学療法レジメン
Biweekly Taxol (入院、外来共通)
 適応: 胃癌

レジメン

薬剤	Day 1	Day 15
TAXOL	140 mg/m ²	↑

処方

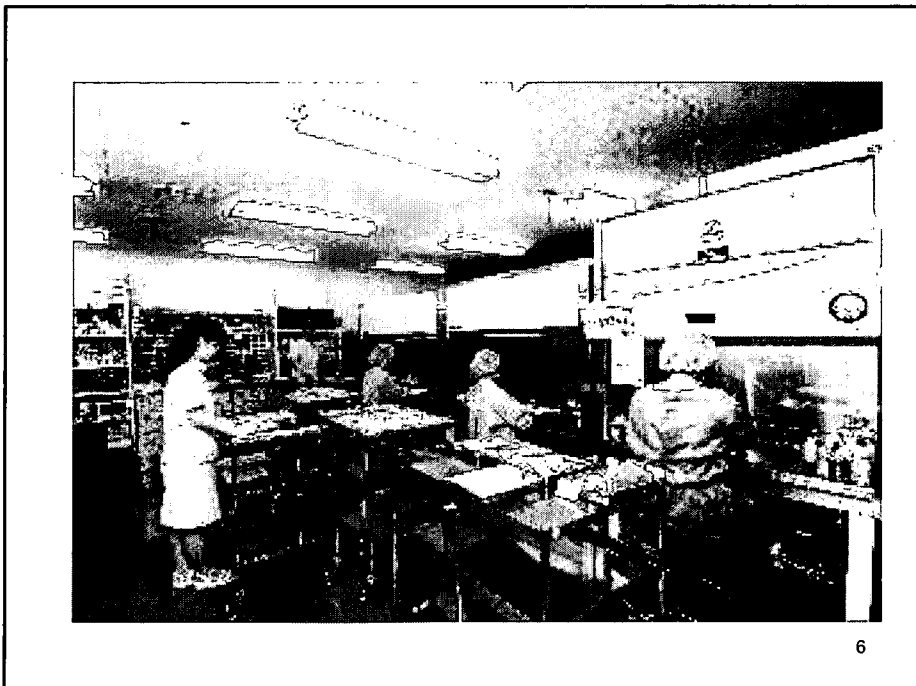
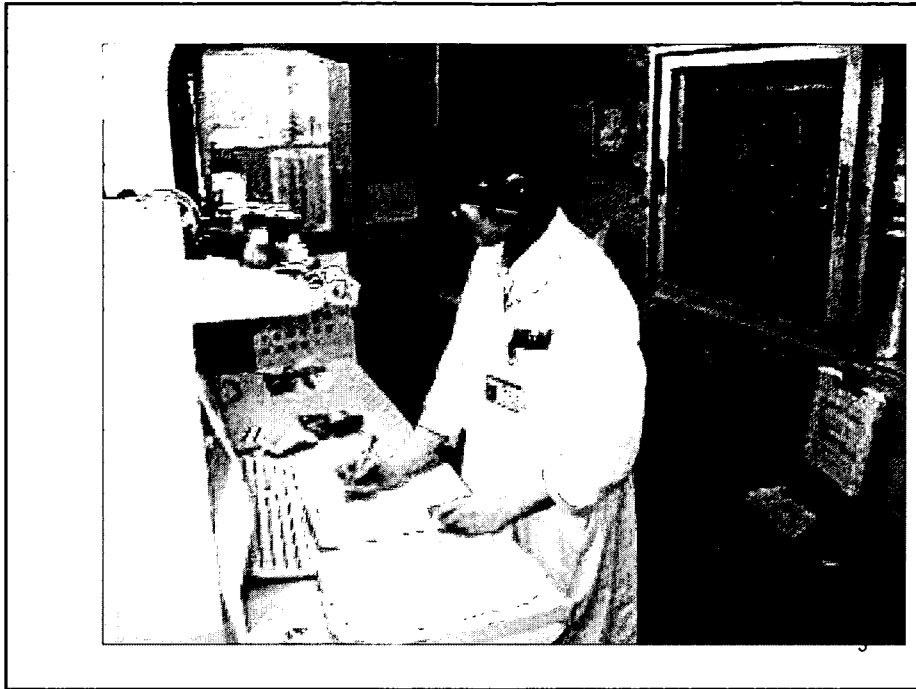
バスマスタレジメン名: 「Biweekly Taxol」

注射処方Day1

薬剤	1日量	用法
主薬	140 mg	9 mL 薬液用6-ポート内注人
デカドロン注	20 mg	11:00~11:10
主薬	50 mL	10分GW
主薬	50 mL	11:10~11:40
主薬	□ mg	30分GW
主薬	250 mL	11:40~12:10
主薬	250 mL	30分GW

処方処方Day1

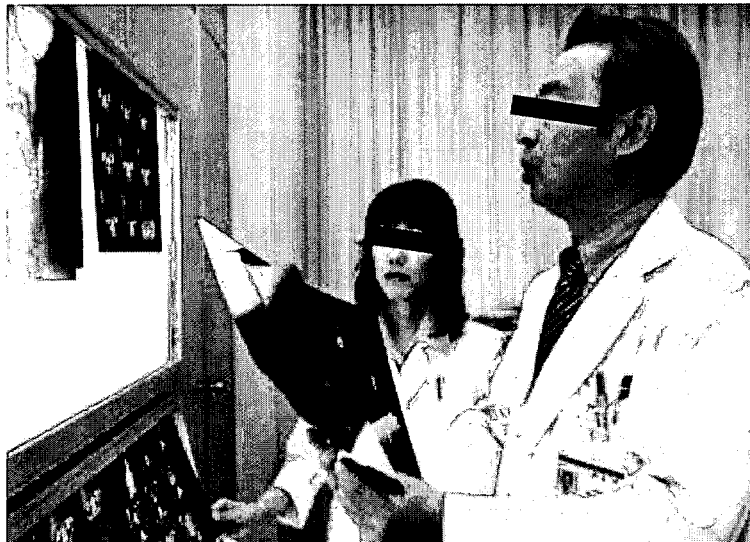
薬剤	1日量	用法
主薬	1日量	1日/14日 薬液の指示通り 11:10



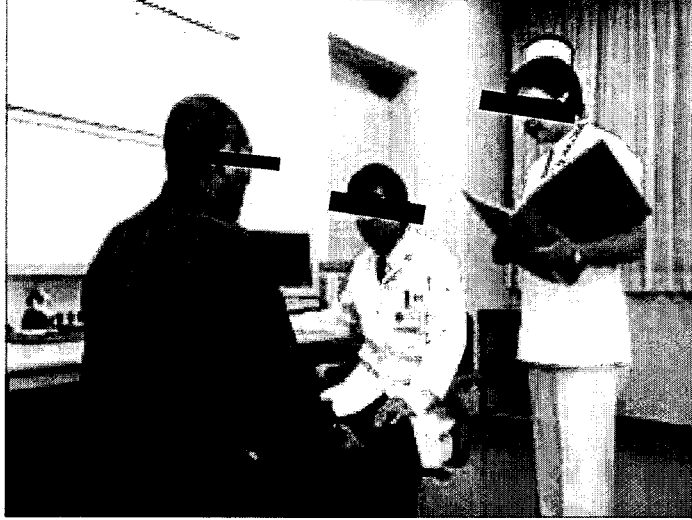
6



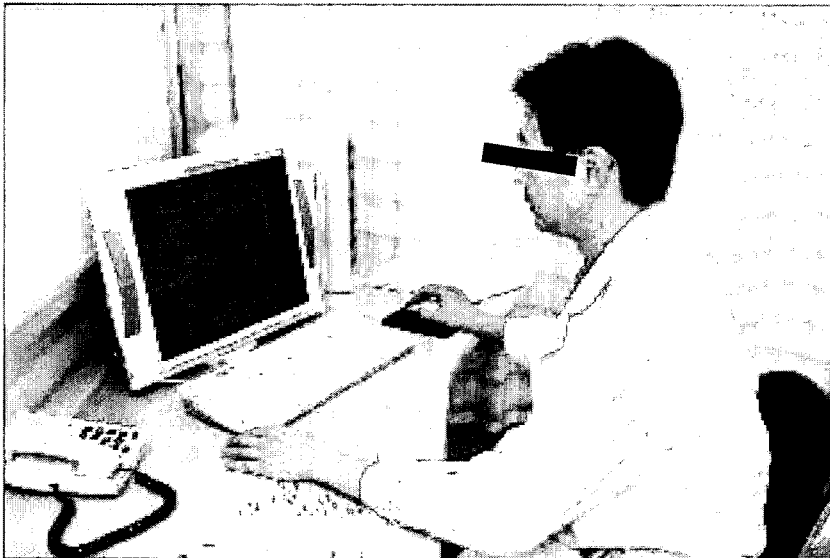
9



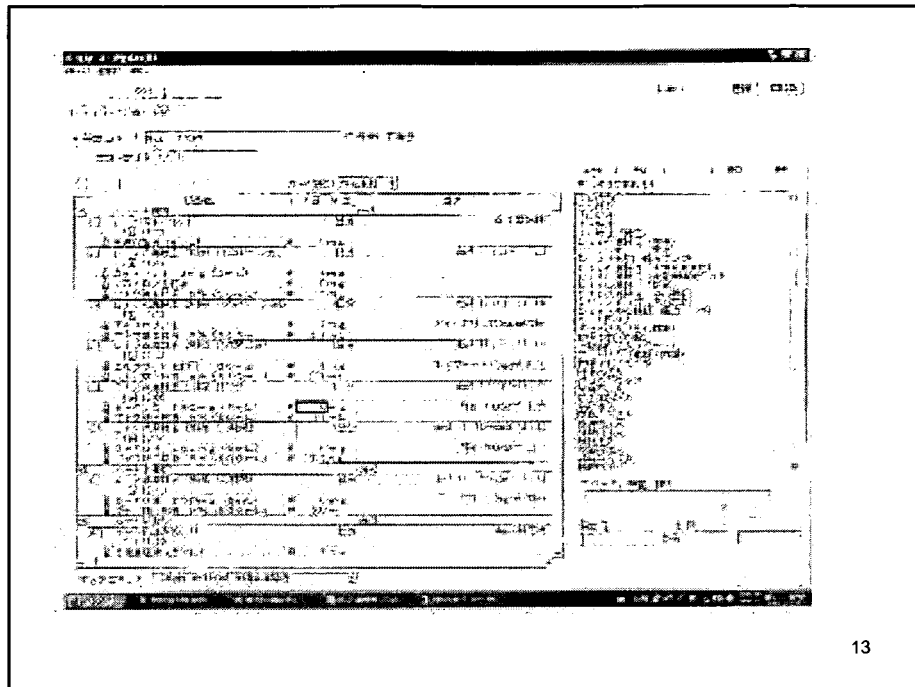
10



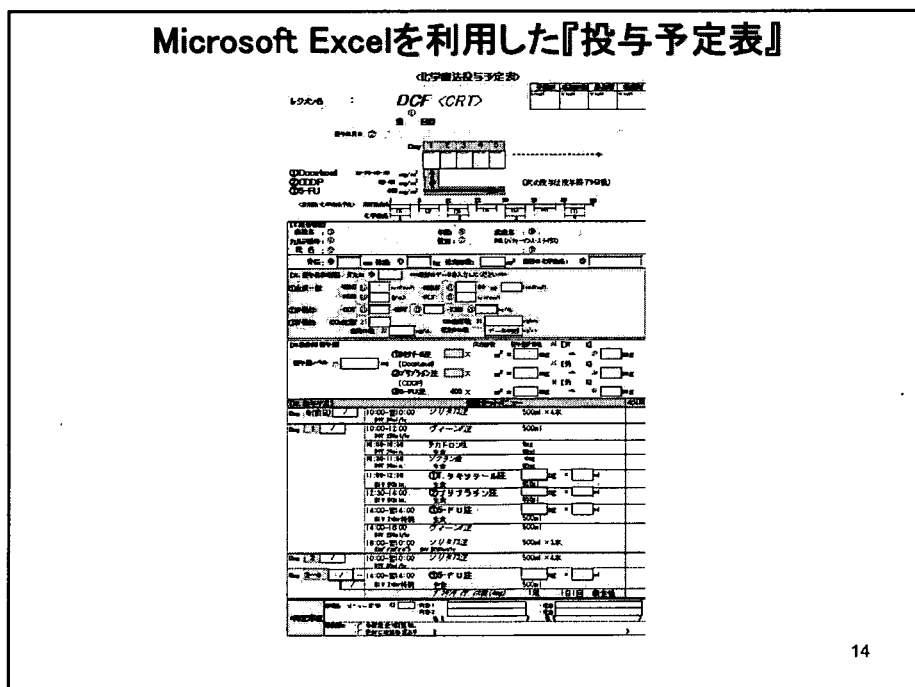
11



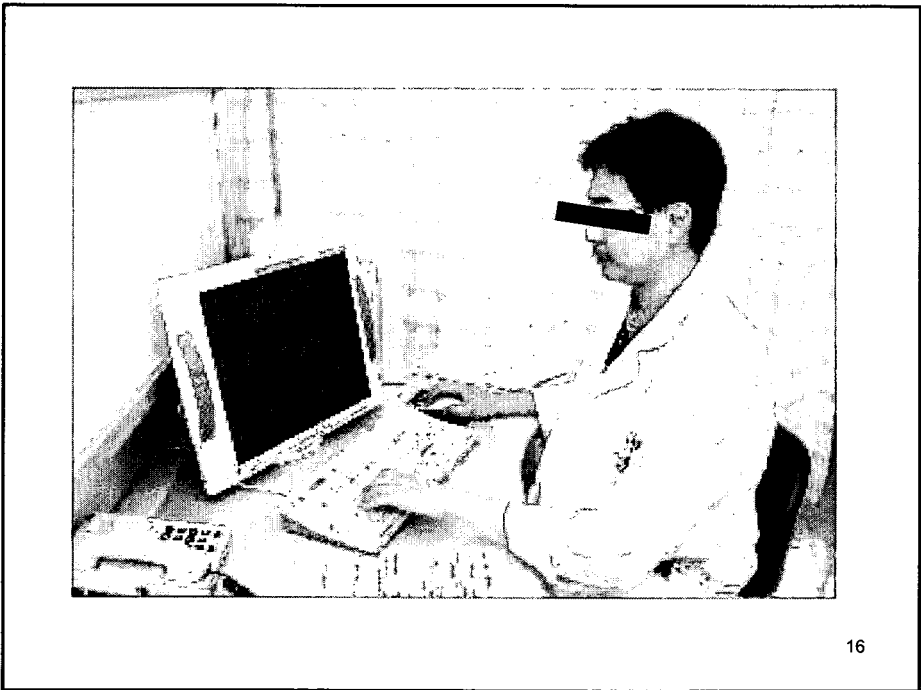
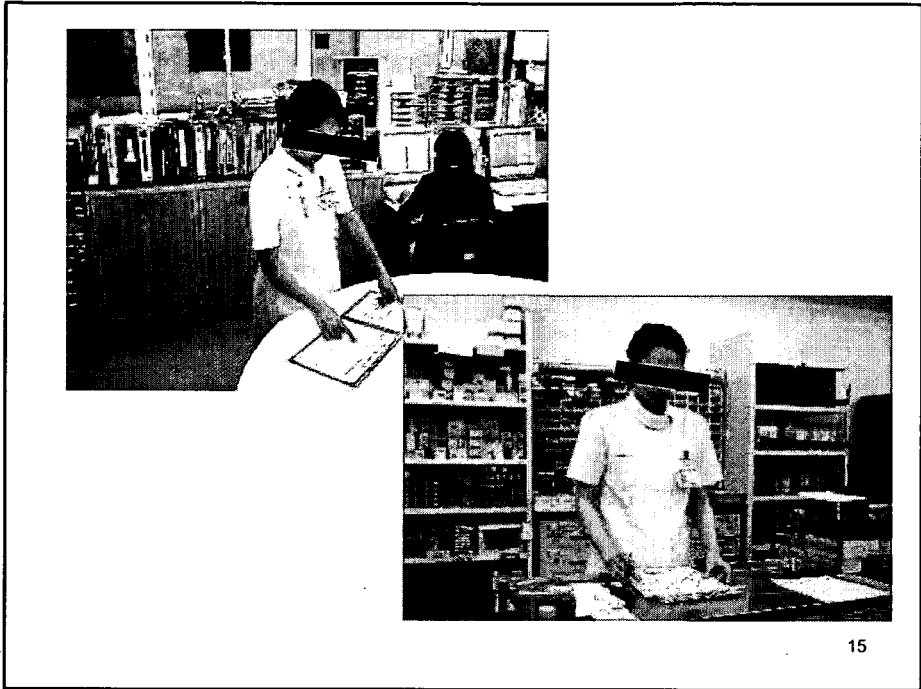
12

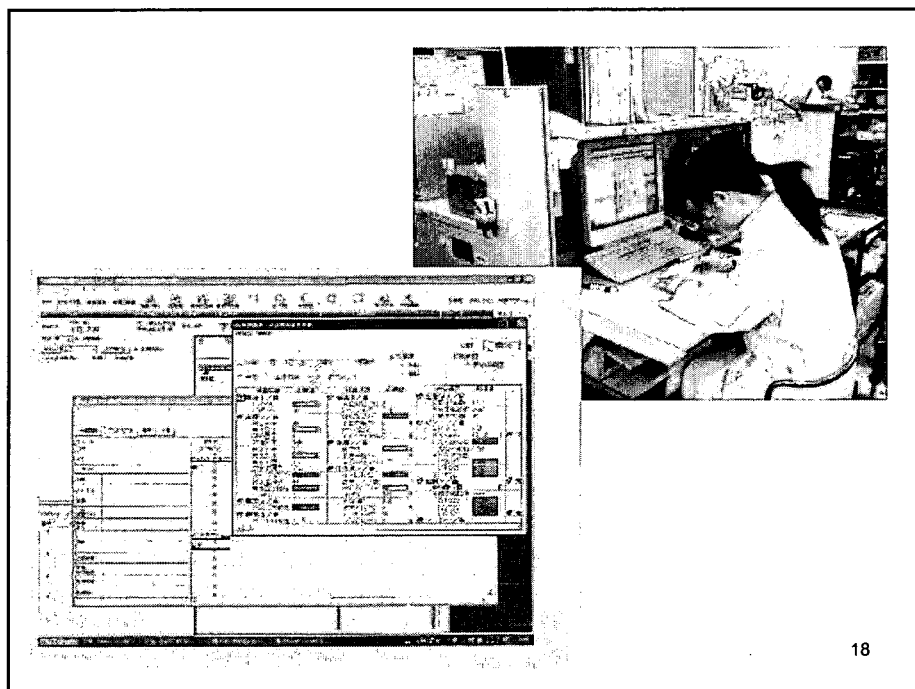
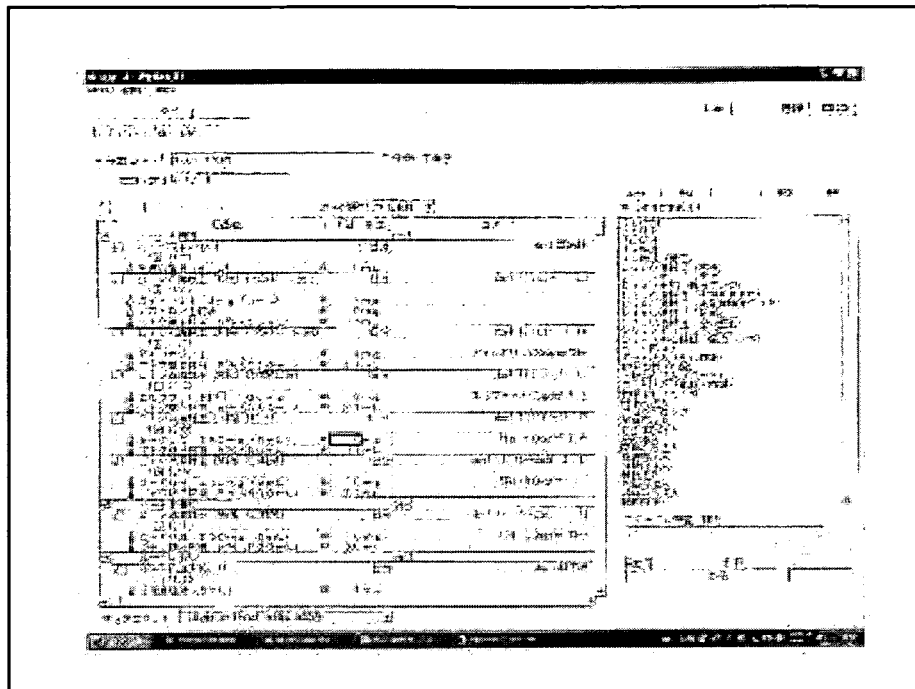


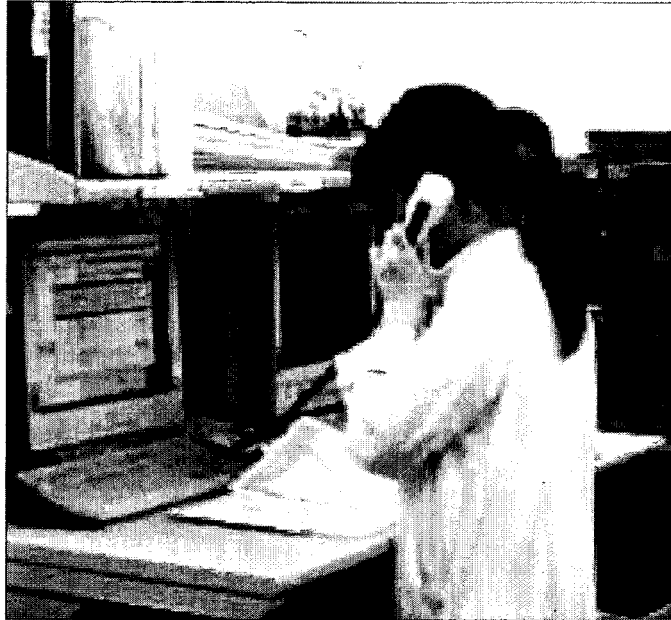
13



14

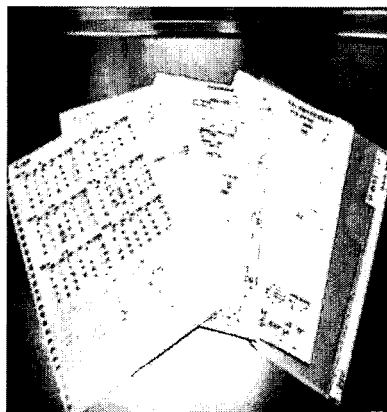






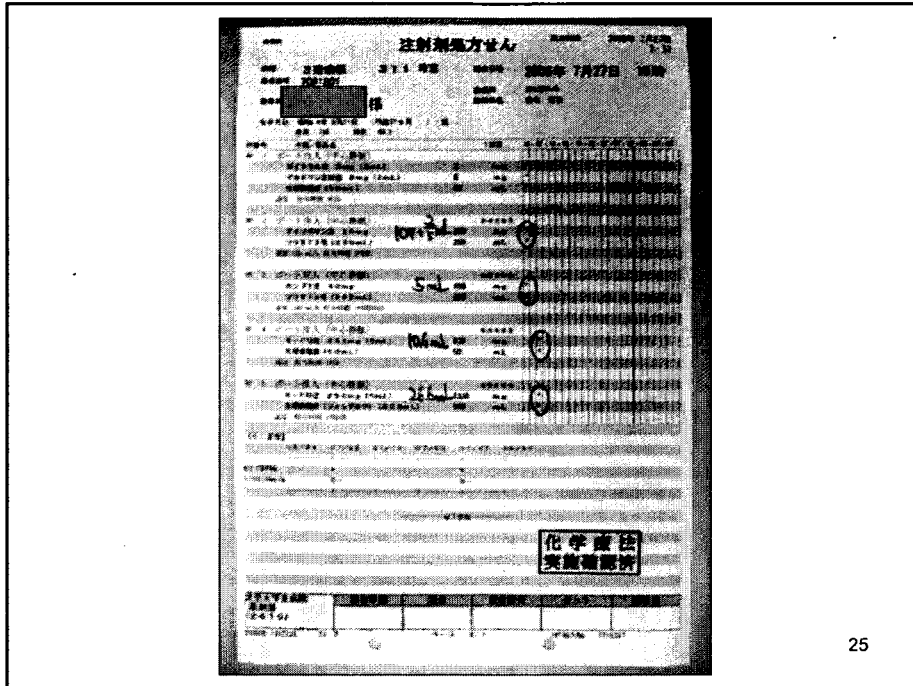
19

薬歴一元管理(患者個別ファイル)

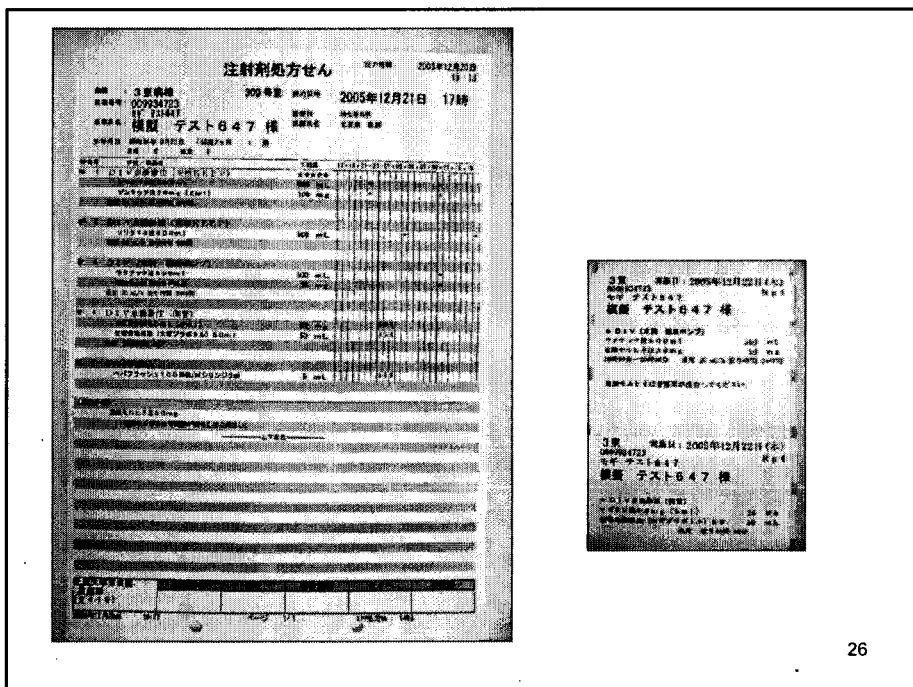


- 入院+外来
- ケモカレンダー:投薬歴
- 入院処方せん(再出力):
処方内容変更時のみ
- 外来処方せん(原本)
- モニタリングシート:身長・体
重、検査値、患者面接記録
- 患者用薬情報用紙:化療分の
み。再出力。

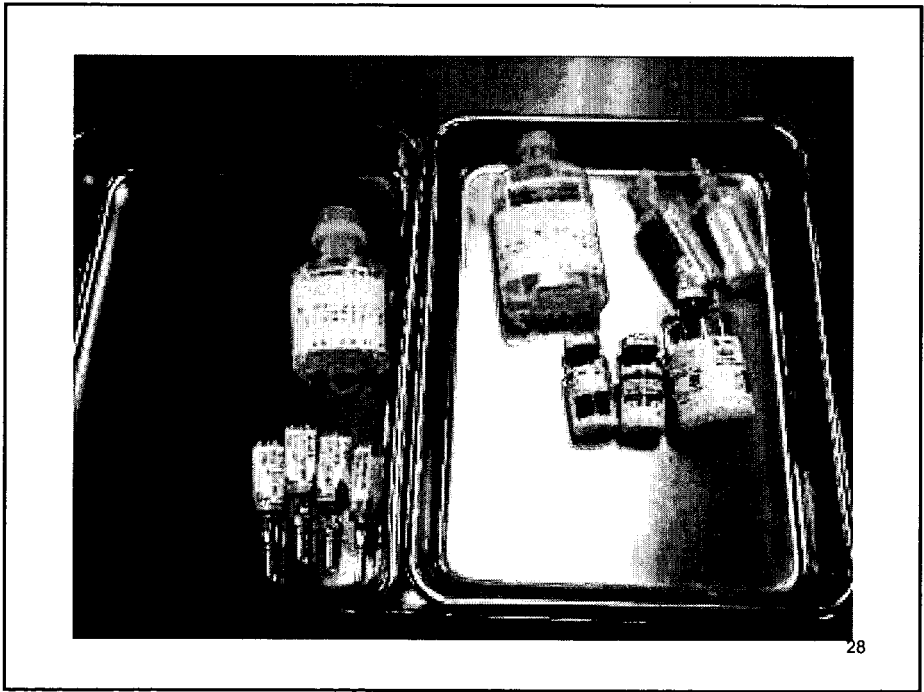
20

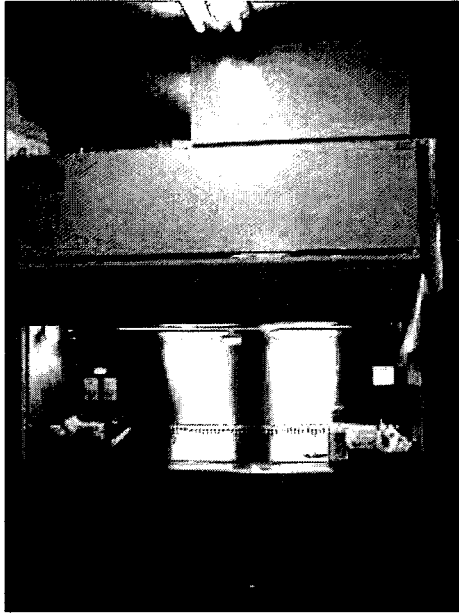


25



26

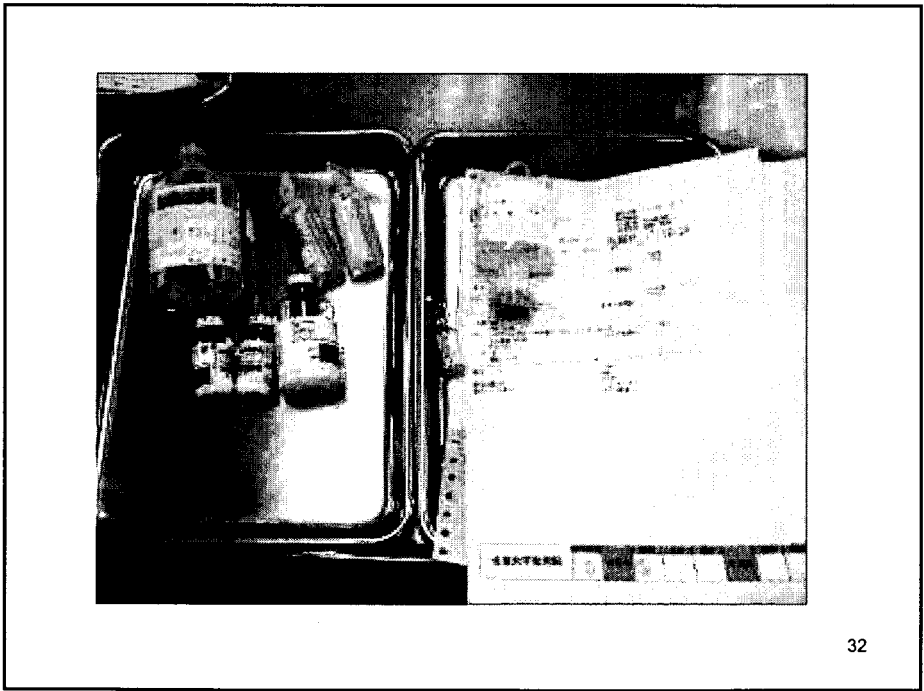
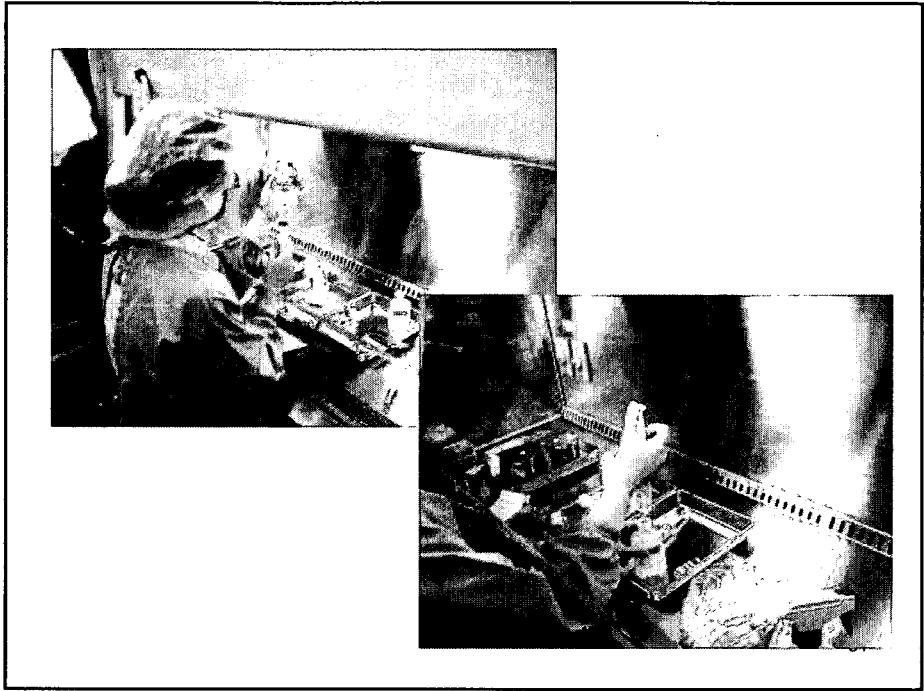


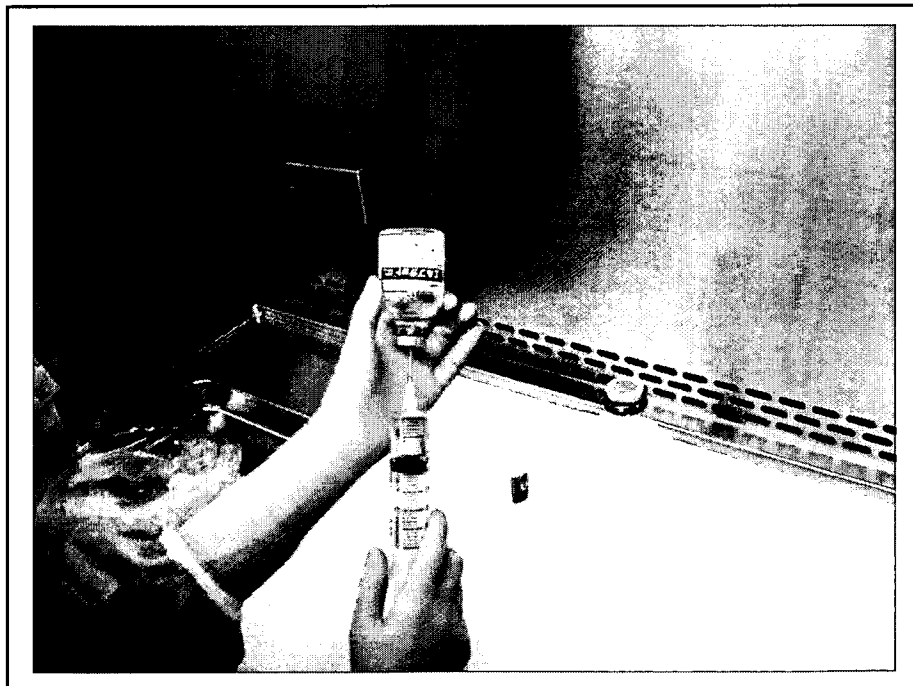
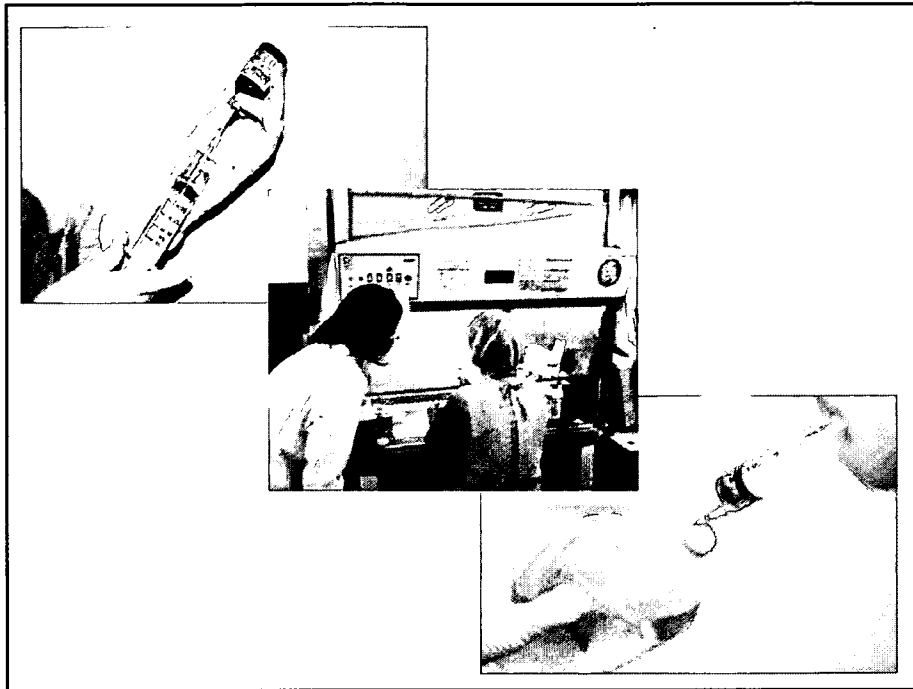


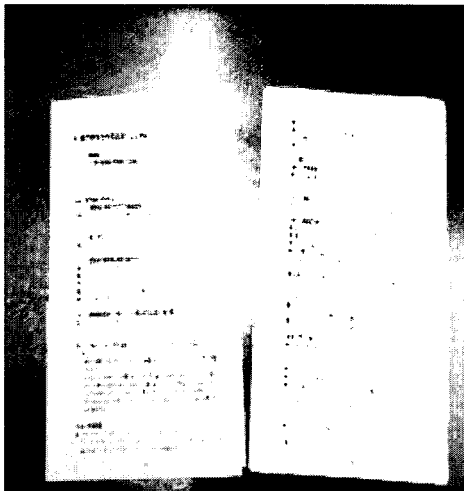
29



30







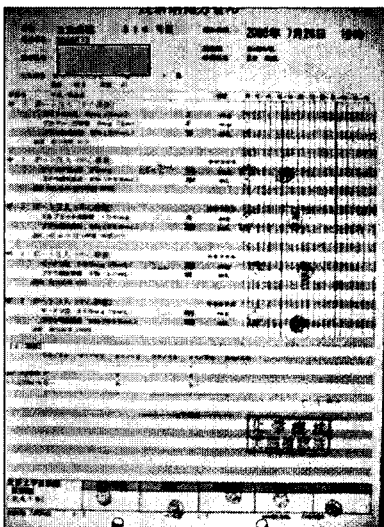
細胞毒性注射剤調剤マニュアル

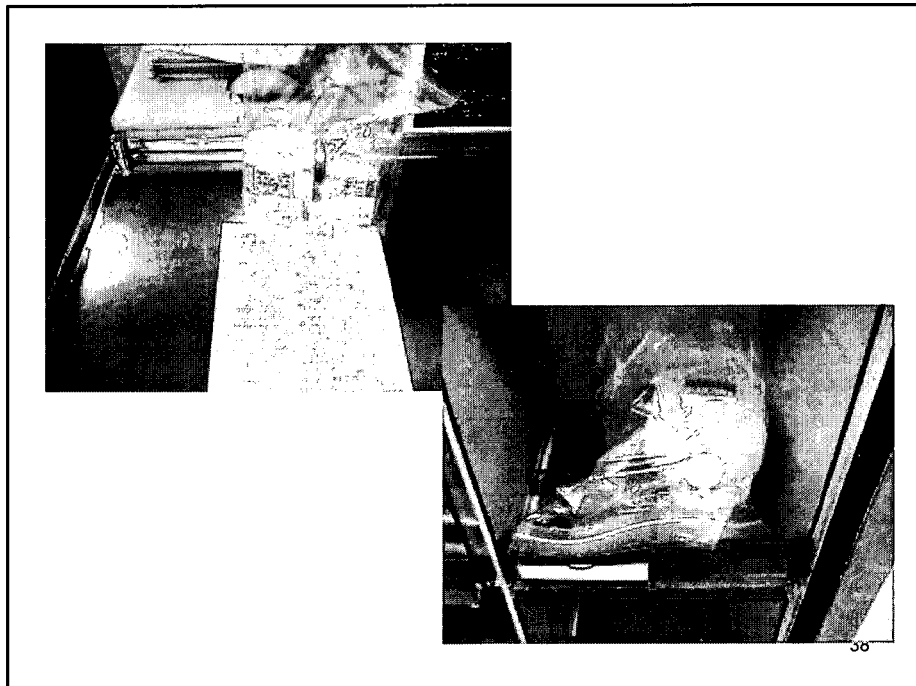
注意
 溶解する細胞毒性薬剤は溶解液を添付する。
 アップラは白金製剤のため安定性の問題から生食を準備する。
 50mg/バイアルは10mL、10mg/バイアルは5mLの生食で溶解する。
 エドキシサンは100mgにつき生食5mLを準備する。
 エルプラットは1バイアルにつき5%ブドウ糖40mLを準備する
 その他、付属品に従う。
 安全キャビネット内のフロンに細胞毒性注射剤適合のバットを置く。
 細胞毒性薬剤の混合準備は、薬剤本数の多いときは特に、細胞毒性薬剤の
 適合が異なるように隣接配置に準備する。
 毒薬の調整剤を準備した際は、毒薬管理ノートに準備で使用した数と換数を
 記入する。

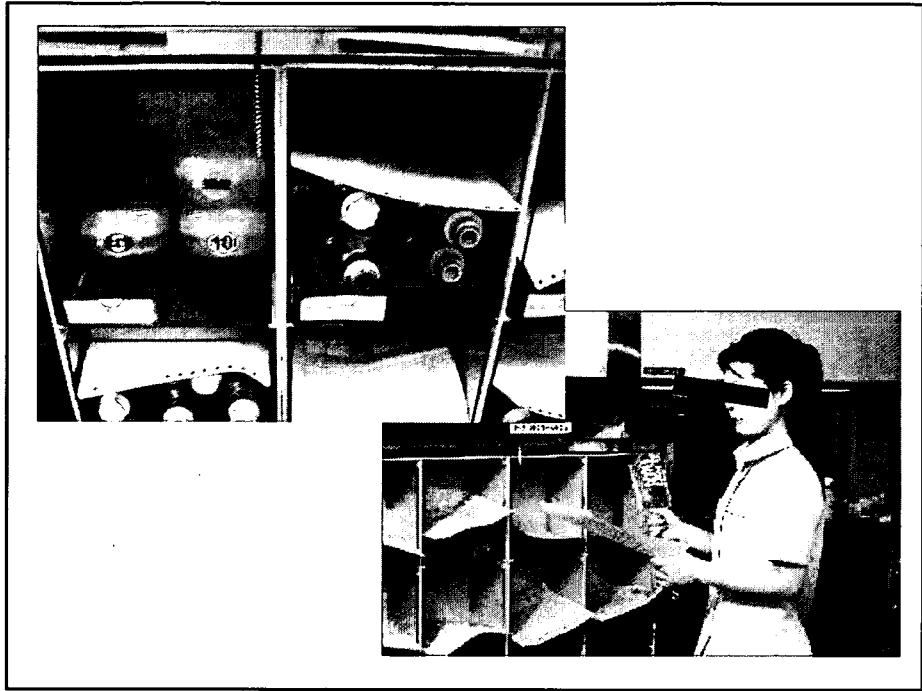
作業資格
 作業手順を把握し、手技を修得したもの。
 一初めはこの作業を行う場合は、上記作業者の指導のもとで行うこと。

着衣
 適合用作業着、手袋、マスク、ゴーグル、帽子を着用しできる限り皮膚を露出
 しない。

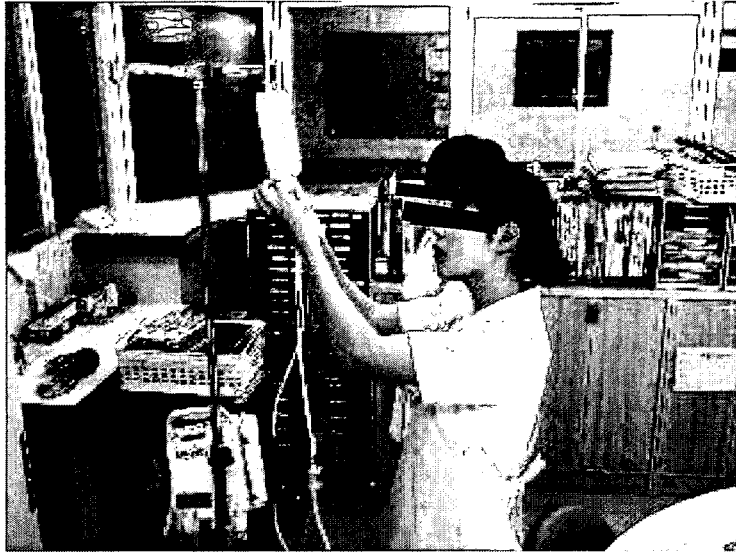
全般的注意
 安全キャビネットまたは送風を止めたクリーンベンチ内で混合する。
 薬液による汚染防止、自らの防護に注意する。
 混合は一般薬と分け、専攻で行う。
 注射剤はデシボ製品(ルアーロック式)を用いる。
 注射剤は適切な大きさのものを選択する。
 針はきつめにしっかりねじる。
 細胞毒性薬剤の計量はアンブルなどの量取筒の時も含め、注射筒の目盛り
 を用いる。その際、1回の量取に使用する注射筒は1本、2回までの換
 引により量取できる最小のシリンジを使用すること。(誤差を最小に
 するため)ただし、60mLを超える場合は量筒を用いてもよい。(全
 量が2mL未満の場合は1mLのシリンジを用いること)
 フード(前面のガラス)は所定の位置以上に開放せずにガラス越しに見る。
 →アクシデントによる目、鼻への飛沫接触を避ける。
 混合時には注射剤をバットの外に出し、薬液の付着を防止する。



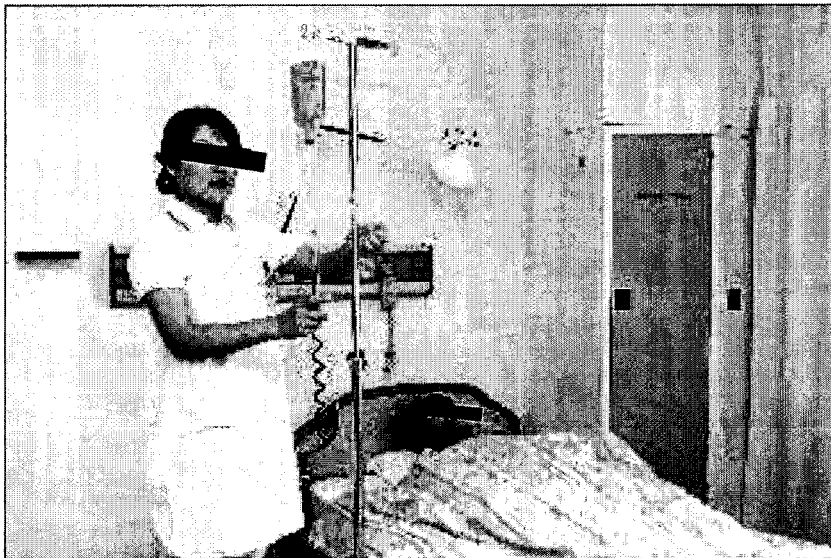




40



41



42